

演 題	3 食胃ろうから 3 食経口・その先の夢
副 題	ピザが食べたい！

フリガナ	カイゴロウジンホケンシセツハマナス
施 設 名	介護老人保健施設はまなす
フリガナ	ゲンゴチョウカクシ エガシラ ノゾミ
発表者(職名・氏名)	言語聴覚士 江頭 希
フリガナ	フクダリッカ ホカハマナスシヨクインイチドウ
共同研究者	福田六花 他はなます職員一同

【目的】

食べることは、身体不自由となり行動制限を得た利用者様にとって最大の喜びである。当施設では食べることに重きを置き、できる限り食への QOL を上げていきたいと考えている。今回のケースは胃ろうから経口摂取へ移行し、食べる喜びを得て QOL を高めた事例である。「大好物のピザを食べたい」という強い思いが職員の気持ちを後押しし、多職種が丸となって取り組んだよい例となった為、ここに報告する。

【事例紹介】

T 様 /60 歳代女性 /要介護 4
 原疾患：右急性硬膜下血腫 (R4.1 月)
 心身機能：左上下肢重度麻痺、ADL 全介助、高次脳機能障害有
 認知機能：HDS-R5 点 辻褄の合わない発言多い。
 食事：3 食胃ろう / 日中活動：リハビリ・入浴以外は臥床

【方法】

R5.8 月入所当初。ゼリーを口へ入れても意識が向かず刺激を入れてようやく飲み込む。活気なく食欲もない。この日から嚥下訓練を始め、徐々に摂取量が増えていく。2 か月後、好きなメニューがある日は部分的に食べるようになり、3 か月半後には 1 日 1 食開始。その後 1 日 2 食へ進んだ頃から、テレビ CM の影響で「ピザを食べたい」と言うようになる。この日からピザを食べることを目標に進み出し、7 か月半後には 1 日 3 食へ。そしてついに、念願のピザを食べる。この日はイベントの一つとして、利用者様全員でピザパーティーを楽しんだ。

【結果】

入所から 7 か月半掛け、誤嚥性肺炎を起こすことなく胃ろうから経口摂取へ移行し、T 様念願のピザを食べることができた。また、食事を進めると共に活気が増し、笑顔が増え、認知機能の飛躍的な向上も見られた。さらに、寝たきりの状態から少なくとも 1 日 3 回は車椅子で食事をするようになり、身体機能も向上。それだけでなく、入所全体でピザパーティーをしたことが思いの外好評で、皆様の嬉しそうな笑顔を見られたことも大きな収穫であった。

【まとめ】

多くの利用者様が ADL を元の状態に戻すことが難しい中、「残存機能をいかに向上させるか?」「生活の中でいかに喜びや幸せを見出せるか?」がリハビリ職としての使命と考えている。いや恐らく、施設で働く者皆が同じ思いではないだろうか。その思いがあったからこそ多職種で協力し合い、この結末に至る事ができたのである。それだけに経口摂取へ進み、好物を食べられた時の T 様の姿は殊の外嬉しい光景であった。人として「食べる」という事は、単なる行為ではなくそこに喜びや幸せを伴うものである。食べる機能を取り戻すことは心の潤いをもたらす、という持論を抱きつつ、今後もその担い手の一人として携われることが私の幸せである。